大陸（北支）

共産八路軍の地雷で負傷

福岡県　富安正光

昭和十六（一九四一）年十二月八日未明、「ニイタカヤマノボレ」という一通の大本営からの暗号により、真珠湾攻撃が開始された。太平洋戦争の勃発で、以来、日本は上を下への大騒ぎとなりました。

毎日のラジオニュースは軍艦マーチの演奏と共に緒戦の赫々たる戦果が放送され、聴く者は血湧き肉躍るの感じで、仕事どころでなく、友達と「やった、やった、万歳！々々！」の連発でした。

日本軍はマレーに上陸、十日にグアム島と比島に上陸、十一日にはグアム島占領、十二月二十五日、香港占領と、正に連戦連勝のニュースに老いも若きも戦勝に酔いしれ、毎日のように働き手の男たちを出征軍人として見送りました。

私は大正十四（一九二五）年十一月九日、福岡県山門郡三橋町の農家に生を享けました。

昭和十三年三月、三橋高等小学校を卒業し、七反ぐらいの田畑の耕作に両親と共に従事し、その傍ら昭和十五年四月から青年学校に通学しました。青年学校では軍隊の予備知識の講義と軍事教練の指導がありました。それだけに毎日の戦勝報道は私たちの若き血を湧かせました。

昭和十七年の秋になりますと、戦況報道も次第に厳しくなり、学徒動員により大学生も戦場へ、

女学生も軍需工場へ応援に召集されるようになりました。正に国を挙げての決戦態勢の状況になりましたので、私も昭和十七年十月一日から小倉の陸軍造兵廠に勤務することにしました。造兵廠の第一工場では戦車や牽引車等の製造組立、第二工場は機関砲や火砲の製造、第三工場では弾薬の製造が行われていました。

昭和十四年五月三十日に発生したノモンハン事件で、ソ連軍の戦車により日本軍の戦車が散々破壊されたという苦い経験から、戦車には改良が加えられて製造されていました。

職場にノモンハン事件に参加した人がいまして、その当時の憐れな日本軍の姿を語ってくれました。

私たちが小学校を卒業する前年に始まった支那事変の戦火は支那全土に拡大し、日本軍は国民政府軍と共産八路軍を相手に交戦し苦労しておりました。当時は数年後自分たちがこれらの支那軍と戦火を交えることになろうとは夢にも考えていませんでした。

昭和十八年に入り私の兄も陸軍に入営し、その後ビルマに派遣されました。南方方面もタイ、ビルマに進撃し、マレーシアの島々、南太平洋の島々にも次々と上陸し、広い戦場となってしまいました。陸軍造兵廠も若い働き手は次々と召集され、三分の一は女子挺身隊の人たちでした。

私も昭和十八年の夏、徴兵検査を受け第一乙種合格を告げられました。甲種合格になれず残念でしたが、戦況の厳しい中でしたのでいずれ召集があろうと、造兵廠の仕事に専念しつつ入隊の通知を待っていました。

通常、徴兵検査が終わって半年ぐらいで入隊するようですが、私は造兵廠勤務でしたので、入隊通知が遅れたのであろうと私なりに考えました。

待ちに待ったこの入隊通知が来たのは昭和十九年十一月でした。当時、南方では連合軍の反撃が激しく、日本軍が苦戦している時期だけに来るべきものが来たと。家族に見送られ、十一月十五日久留米の西部第四十八部隊に入隊しました。

入隊して一週間目に北支への動員命令が下り、急遽久留米駅より門司駅へ軍用列車で移動し下関より関釜連絡船にて釜山港に向いました。甲板で離れ行く九州を見ながら、はるか東方の宮城遥拝を行い、これが日本の見納めになるのではないかと思いました。釜山港から釜山駅へ、ここから軍用列車にて釜山駅を出発しました。

軍用列車は朝鮮半島を縦断し、京城（ソウル）、新義州、安東を経て満州国内に入りました。私たちが携帯する腰の銃剣も竹鞘で水筒も竹筒、弁当箱も竹で編んだ弁当箱でした。

初年兵として列車内での苦労を覚悟していましたが意外と心配することなく、列車は山海関から北支へ入り、北京、石家荘を通過し陽泉駅に到着しました。

久留米を出発し八日目の十二月一日に陽泉駅に到着しここで二個中隊が下車し残る三個中隊は更に奥地へ移動しました。

軍用列車から下車しますと、寒さに震えました。初めて見る北支那の山西省陽泉の街、真白い雪が見渡す限りの銀世界、大行山脈の連山が高く聳え立ち、白雪皚々（がいがい）とはこのことで、気温も零下一五度から二〇度ぐらいの寒さでした。兵舎は立派で暖房があり室内に入ってほっとしました。一同に早速防寒服が配布されました。

陽泉では石炭が採掘される関係もあって、町中には小さな製鉄所があり、日本人の従業員も相当数いると聞きました。入隊一週間目で北支へ移動を命ぜられましたので初年兵の訓練はここで早々に開始されることになりました。

陽泉から南へ五十キロぐらいの地点に苗陽という立派な城のある所まで雪中行軍して、この街で鉄道警備を兼ねての軍事訓練が行われました。敵軍の真っただ中での訓練ですから、いつ敵が来襲しても応戦出来るよう小銃には実弾を込めての訓練でした。北京から大原に通ずる京大線を警備するのが私たちの任務であり、厳寒の中で敵を警戒しての訓練ですから、内地の兵営内での訓練とは

違い真剣さと気合が違っていました。
寒いために飯盒の飯は凍っており、口の中でざくざく音を立てて食べることもあり、飯の味はまったくない食事をしたこともありました。班対抗で負けると「貴様達に食べさせる飯はないぞ」と飯盒を豚小屋に投げ込んで、食事はお預け、で食べないこともありました。
このように余りにも私的制裁が厳しいので、制裁を注意する命令が出たこともありました。一期の検閲までの三カ月間は大変な苦労で、その厳しい訓練は今でも忘れ得ません。苗陽で訓練を受け検閲は陽泉の本隊で実施されました。
このころ米軍の沖縄攻撃が始まり、この地方を警備していた石部隊が昭和十八年三月、固部隊に警備を引き継ぎ沖縄に移動したことも聞きましたが、後日、石部隊は沖縄戦で玉砕されたことを聞きました。
共産八路軍は山の中に穴を掘り、「もぐら」のような生活をし、高い山の上から日本軍を監視して少人数と見ると襲撃して来ます。巡回中の日本兵士が襲われたことも度々ありました。時折アメリカ空軍の空襲もありました。特に八路軍は地雷を敷設し日本軍の追撃を妨害することが多く、地雷による負傷者も多いと聞きました。
冬の間は鳴りを潜めていて春ともなれば至る所に出没し日本軍を悩ませると聞かされていましたが、幸い私たちの中隊は、旅団本部が兵舎の前にあった関係上、治安は良く衛兵や不寝番に立っても不安はありませんでした。
営門の前に衛兵として立ちますと、石炭の町ですから支那人が馬車に無煙炭を山のように積んで通り、衛兵に向ってペコリと頭を下げます。その石炭馬車が道いっぱいに次々と通り賑やかなものでした。陽泉は炭鉱の街であると共に鉄工廠の街でもあり、また周辺は山の上まで段々畑で農作物が収穫され食糧に困ることはありませんでした。
私たちがおりますころは全山雪山でその姿を見ることは出来ませんでしたが、雪山の各所には八

路軍が穴を掘って「もぐら」のように潜んでいるのであろうと油断は出来ず、寒風の吹きすさぶ中、警備に務めました。気候は大陸性特有の三寒四温で、寒い中にも温かい日もありました。

南方作戦の不利に加えて、沖縄に対するアメリカ軍が攻勢を強めるのに呼応して、国民政府軍と八路軍の日本軍に対する攻勢が激しくなり、日本軍の犠牲も山西省から河北省に至る各所で出ました。

沖縄の次は山東省方面にアメリカ軍の攻勢が予想され、このため日本軍も山西省から山東省へ移動を始めると、八路軍もこの移動部隊を襲撃するようになりました。八路軍が欲しいのは日本軍の武器弾薬で、日本軍撤退後国民政府軍との対決に備え、各所でゲリラ作戦を展開していました。雪解けを待ち構えたように鉄道沿線に出没し列車の運行を妨害しました。

三月下旬、私たちの固部隊も運城、済南、大原、青島に移動中に八路軍の急襲を受け、数カ所で犠牲者が出たと聞きました。山西省から移動した部隊は「至厳」部隊と合流し、山東省の海岸一帯を陣地構築のため海岸際の山々に地下道を掘る作業が不眠不休で進められました。

当時、兵力を補充するために現地在留邦人の男性は召集され入隊してきました。私たちの隊にも女子中学校の校長先生や警察官であった人たちも入隊して来ました。日曜日になると家族の面会者が来て、私たちも持参された食べ物などを分けてもらったこともありました。

ある現地召集で入隊して来た兵隊が「古年兵殿は出身はどこですか」と尋ねるので「柳川たい」と返事すると「私の妻が柳川の近くです」といっていて日曜日「娘二人が面会に来ましたので古年兵殿も一緒に娘たちに会って下さい」というので面会所で会いました。すると奥さんが私の町の公園の近くの方と分かり親しみを感じたものです。この兵隊も年令四十歳ぐらいでしたが訓練が可哀相なぐらい痛々しいものでした。

山東省でも平地から一歩山の中に入ると八路軍の陣地があって、日本軍の様子を看視しており、特に農民の姿をして日本軍が少数と見ると襲いかかって来る、あの有名な便衣隊が横行して油断が出来ませんでした。あるとき、密偵が捕まって情報を自白させるため、あの手この手で責める仕打ちを見て、これも戦争のためかと顔を背けたこともありました。

昭和二十年五月九日、海防地区の八路軍の掃討作戦中、八路軍が張り巡していた地雷に触れたため爆発、「みんな大丈夫か」と思わず叫びました。誰もやられている者がいないので「あっよかった」と気を緩めた途端、顔を撫でたら血が流れて目に入って目が見えなくなっているのに気付きました。左手を見たらベットリと血が付いて「ざくろ」のように傷口が口を開けていました。気が張っていたので痛みは感じなかったのですが首筋から腕にかけて痛み始めましたので、急いで三角布で左腕をくくっていますと後方から衛生兵が担架を持って走って来ました。

私が旅団の先兵中隊の、さらに先兵分隊の最前線にいたので、被弾状況が分かっていたのでしょう。衛生兵が腰から股に触ると軍衣袴が真黒くなり、痛みが全身に走りました。

ああこれで私は最後かと、「天皇陛下……」と叫ぼうとすると「この野郎」と私の顔を殴り始めました。先ほどから気が遠くなりよい気持ちになりかかっていたのを呼び戻すため叩いているのに気付き、私は「よーし、何くそ」と叫びました。衛生兵は救急治療を施しながら「お前はこれくらいの傷で死にはせん。天皇陛下万歳はまだ早い」と気合いをかけられました。そして近くの部落まで担架に寝かされ運び込まれました。

そこでは戸板に布団のような物を敷き、それに寝かせられました。それから三日間戸板に乗せられ運ばれましたが、四人の兵士が歩く度に揺れるので船酔いどころじゃない苦しさでした。目を細く開けて見ると、戦友たちが私の小銃から装具ま

でみなが持ってくれているのに気付いて「みんなに迷惑かけてすまん」と詫びました。

三日目にやっと民家の中で手術が始まりました。麻酔なしの手術ですから両手両足、後方から肩を六人が私の全身を押えて患部の地雷の破片の取り出し等を始めましたがその痛いこと歯をくいしばって「うんうん」といいながら、手足を押えてくれている初年兵たちが「古兵殿頑張って下さい」と励ましてくれる声を聞きましたが悔し涙が流れました。衛生兵が傷ついた指を切断しましょうかというので「切断するな」と叫びました。

一応の手術を終えて海防から海岸線の海陽という街まで一週間、戸板に乗せて運んでくれました。後で調べたら門司から鹿児島市ぐらいの長い距離になると思います。海陽から海軍の船に乗せられて青島の兵站病院に入院させられました。この病院で一週間ぐらい治療を受けた後、天津の兵站病院に移送されました。天津の病院は立派で設備も整っており、三カ月間治療を受け、八月九日に退院することができました。

青島の原隊へ復帰を命ぜられましたので、天津から済南へ、済南から青島へと一人で無防備のまま列車に揺られて帰りましたが、見ることも初めての所を武器一つ持たずによくぞ帰って来たなあと、我ながら感心しました。

青島では既に部隊が移動しており、受け入れ部隊が分からず、一週間ぐらいは青島の街を見学して回りました。当時青島には日本人が四万人ぐらい住んでいましたので、治安は落ちついていました。後日、この青島の街の見学が大変役に立ちました。アメリカ軍機は毎日のように偵察に飛来して来ました。支那の本土ですから爆弾を投下するようなことはありません。

終戦を聞いたのは青島で、先輩たちから十五日の夕方聞きました。戦争は負け戦だったのか、戦争の状況からいずれ敗戦はと予想はしておりましたが、実際聞いたときは残念でした。特に私には八路軍の地雷で負傷して三カ月も入院していただ

けに退院早々終戦とは申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

現地召集で来ていた人たちには、近いうちに自分の家に帰れるようになるだろうから元気で頑張って下さいと話しましたが、みんな口々に残念と語っていました。三日後、国民政府軍により武装解除が行われ、共産軍が勢力を拡大し始め、日本軍の武装を解除させて困るのは国民政府軍で、日本軍と交代して整備することになりましたが、一週間もたたないうちに共産軍に奪回され、青島市内では支那人の略奪が始まり大騒動になりました。

青島の兵站病院にも支那人が薬品や敷布等を略奪に来るので、それを防ぐため私は二十五人ぐらいの兵隊を引率して兵站病院に応援にも行きました。また市内の暴動の鎮圧にも努めました。ここで青島の街を見学しておいたのが役に立ち、皆からも感謝されました。

日本軍が警備し維持して来た鉄道も、八路軍により鉄道線路は爆破され、給水塔や電柱までも倒されて使用できなくなりました。そこで国民政府軍からの依頼があってのことでしょうか、当時の日本軍司令官の命令により国民政府軍に協力して、八路軍を撃退することになりました。

この作戦は済南地区でも、大原地区でも同じ作戦がとられ、終戦後になって八路軍との交戦により日本軍の犠牲者が多く出たのも、この作戦の結果からでした。

私の戦友も済南の近くで八路軍と交戦し、日本軍が大打撃を受けて多くの死傷者が出る中で、人事不省で倒れていた時、八路軍の兵士が転がっている日本兵を一人一人銃剣で突き刺して死亡を確認しているのを見て、「これは大変」と横の溝の中の穴に入って気が付いたら日本の人が輸血をしてくれて助かったと語ってくれました。

日本軍は国民政府軍の傭兵のような状態で、共産軍に対抗して治安警備の任務を遂行しましたが、共産軍はゲリラ戦術で出没しますので苦労しました。共産軍は鉄道線路のレールから枕木まで持ち

去ってしまいます。そのため邦人の引き揚げが始まると列車がなく、みんな歩いて青島に集結させられ、それは大変な引き揚げ風景でした。

警備しながら哀れに思ったのはご婦人方が子供を背中に背負い、両手に子供の手を握り歩かれる姿は可哀想でした。男という男は軍隊に引っ張られて男手のない引揚げに、どんなに苦労されたでしょうか。奥地から歩き続けて青島に集まる人たちの苦労は想像に絶するものがあったと思います。まさに戦争の悲劇でした。

終戦後昭和二十一年二月まで、共産軍と戦火を交えながら原地人の治安維持と在留邦人の引揚げ者を守るため、日夜危険に直面しつつ警戒にあたりました。国民政府軍の兵士とは「朋友」といい、表面だけは仲良くして頑張りました。子供たちも「朋友、々々」となついてくれました。

在留邦人の引揚げが終了した時点で、日本の軍人の復員が始まりました。私たちも青島駅の倉庫で二泊しましたが、倉庫の中には砂糖等が山積みされていました。

昭和二十一年二月四日、支那大陸と離れる日がやって来ました。青島の港に碇泊している米軍のリバティに乗船するにあたり、米軍の簡単な検査を受け乗船しました。上下の室に押し込まれ、まさに「寿し詰め」の状態です。坐ったまま身動きも出来ません。日本に帰れる喜びもありますので文句もいわず辛抱しました。甲板に出ようにも出れず、坐ったままで「支那大陸よ、さらば」とつぶやき、種々の思い出が頭の中を駆け巡りました。

酷寒零下二〇余度の中での山西省の苗陽での一期の検閲までの苦しい訓練、黄河に浮かぶ苗陽城のすばらしさ、国民政府軍と八路軍を相手に交戦しつつ山東省へ移動中の出来事、海防での八路軍の仕掛けた地雷が爆発し負傷した時の痛み、六人がかりで麻酔なしの手術の痛かったこと、戸板に乗せられ何回も戦友たちに迷惑をかけたこと、天津兵站病院に入院中負傷で入院していた佐渡島出身の海軍航空兵に頼んだ手紙は無事福岡県の実家

に届いたであろうか、終戦間際に聞いた広島と長崎に投下された新型爆弾により、広島と長崎はどうなっただろうか等考えていました。

船中食事は缶詰類を渡されました。「日本が見えたぞ！」の声に起されたのは二月六日、佐世保港の針尾にやっと到着しました。

頭から真白い粉を吹き掛けられて一年三カ月ぶりに踏んだ日本の土、無事に日本の土が踏めたと嬉しく涙が頬を濡らしました。海外各地から引揚げて来られた民間人は、持てる物は持って来られたでしょう、あちこちに立派な物が散乱していました。

引揚者宿舎に二泊しましたが、その間あれを盗まれたこれを盗まれたと、終戦後の混乱をこの宿舎で見せつけられました。二泊して南風崎駅より飛ぶようにして三橋町の実家にたどりつきました。

出迎えた家族の言葉で分かったことは、兄はビルマ戦線で戦死したこと、海軍航空隊の人に頼んだ手紙は無事届いていたことで、家族は少しは安心したということでした。

そして仏壇の前に座り手を合せました。戦後は、敗戦後の祖国の再建に建設業を通じ、死んだつもりで頑張りました。

八十二歳になる今日まで元気で、社会に感謝し、世のため人のためと努力しております。